

テーマ：地域からの発信

常磐会短期大学 教授 しめだ しんいちろう 卜田 真一郎さん



人権保育専門講座8は3回の連続講座です。家庭支援推進保育士の方を中心に、専門性を高めたい保育関係者の方々を対象に開催しています。

<前回までのふり返り>

連続講座の第1回(6月)は、長瀬正子さんに「子育て支援・保護者支援を考える～社会的養護の営みと当事者の声から～」と題してお話いただきました。今まで社会的養護の必要性について連続講座で取り上げたことはありませんでしたが、今回長瀬さんに来てもらい実現しました。絵本の紹介などもしてもらいながら、多角的にお話いただきました。

第2回(9月)は、保田維久子さんに「人権の視点に立った学級集団づくりの在り方」について、「ごっこ遊び」の実践をとおして考えるお話をさせていただきました。「できるからいい、できないからだめだ」という価値観に凝り固まっていくことがないように、日常から「おとなにも苦手なことがある」ことを伝えるべく、「豆が嫌いな園長先生」を自称する保田さんに、ついに来ていただくことができました。

1 導入の話(卜田さんより)

この連続講座では、「うちの園(所)にはこんな課題がある」ということを出し合い、問題を共有し交流し合って、次にどんな発信ができるかを考え合っています。

<保育計画作成のステップ>

保育の内容を考えていくときに、

①子ども理解→②ねらいを立てる→③保育の活動内容を考える→④保育者のかかわりを考える

…という4つの段階をふんでいく流れが大切です。

このような流れが大切なのは保育に限ったことではありません。そのことを中学校の吹奏楽部顧問の先生の、部員へのかかわり方に関するエピソードをとおしてお話します。

私は短大の吹奏楽部の顧問をしています。夏にはコンクールがあるのですが、それに参加していた国立大学の附属中学校と地域の公立中学校の顧問の先生方に出会いました。その顧問の先生方の指導方法は全く違うものでした。国立大学の附属中学校の吹奏楽部の顧問の先生は、練習中の演奏に気になるところがあると、演奏を途中で止めさせて「今の演奏、どう思う？」と問いかけます。そうすると、生徒たちは自分たちの演奏に対して「〇〇だと思った」「△△は～すべきだ

と思う」などと次々に発言をします。それに対して、公立中学校の顧問の先生は、「ここはこうするんだ」ときっちり、こと細かに指導されます。この指導方法の違いはどこから来るのかと言えば、子どもの生活背景など抱えている状況が全く違うことにあります。国立大学附属中学校の先生は、「うちの生徒は、おとなの意図を読み取ることは長けているが、自分たちで考えて発信する力が弱い。だから、自主性を最大限に尊重したアクティブラーニング型の合奏をしているのです」と話されていました。一方で、公立中学校の先生に話を聞いてみると、「うちの生徒たちにはほめられたことがない子が多いのです。細かく教えることにより、うまく演奏できた時に認められる楽しさを感じさせたいのです」と話されていました。

保育や教育の現場では、子どもの姿からねらいを定め、取組をつくっていくことが重要です。

より深い保育内容を考えるためには、地域の現状や思いを知っておく必要があります。知ることがスタートとなり、地域と園・所の協働の関係がつくられていくからです。保育というのは何も考えなければ先ほど(前頁)の4つのステップの③と④だけで回せてしまいます。そうすると、「なぜかわからないけど毎年この活動をやることになっている」ということで活動が決められていきます。その結果、子どもの姿や本来のねらいが忘れ去られてしまうことがあります。そうならないためには、保育の原点に戻らないといけません。



そこで今日は原田愛理^{はらだあいり}さんに、地域にはこんな思いがあって、こんな取組をしているという話をしていただきたいと思います。なぜ原田さんに来てもらったのかというと、以前三重県人教事務局に勤務されていて、保育・教育現場の現状にもずっとかかわってみえて、保育・教育現場と地域の両方の視点をもっていらっしゃる方だからです。両方を知っているからこそ、両者がつながるのだと思います。



テーマ 市民館における「地域学習・活動」について

【原田愛理さんの紹介】

原田さんは2005～2014年度までの10年間、三重県人教の事務局員として勤務されていました。2015年度からは、原田さんの地元にある津市雲出市民館の人権教育指導員として、地域の子どもたちの育成等に尽力されています。



2 原田さんのお話より

(1) 地域の現状について

今日は雲出市民館における「地域学習・活動」についてお話しさせていただきたいと思います。参加者のみなさんは県内各地から来ていただいていると思いますので、まずは地域の現状からお話しします。私の暮らす地域は津市にある小さな農村部落です。80軒ほどの世帯に約180人が暮らしており、その中に市民館（隣保館）があります。私は教育集会所の指導員として勤務しています。

この地域では、高齢化がすすんでいて、一人暮らしや二人暮らしのご高齢の世帯が大半です。子どもがいる家は15世帯くらいです。我が家も含め、3～4人くらい子どもがいる家庭が多くあり、一見すると地域に子どもがたくさんいるように見えるのですが、子どもがいる世帯は全体から見るととても少ないです。

A町という町が、B・C・Dという小字に分かれており、B地区だけが被差別部落だと言われています。B地区の年配の方々の中には「そっとしておけばなくなる」「自分がしっかりしていれば大丈夫」「こんな市民館があるからなくならへんのだ」「この地域がなくなればわからへんやないか」「この地域の子らには皆この地域から外へ出ていってもらったらええのだ」という考え方をもっている人がいます。わたしたちの祖父母の代のそのまた親の世代の人たちが部落解放運動をすごくがんばっていました。それは全国水平社設立の時代にまでさかのぼります。祖父母の代の方々が子どもの頃にしんどい思いをしたのだろうと思います。



地域には伊勢表^{いせおもて}(*1)で生計を立ててきた家が多いのですが、市民館にたまたま伊勢表が置いてあったとき、二人の方が伊勢表を取り去って捨てました。伊勢表が置いてあるのすら見たくなくて「そんなん置いてあるから部落だとバレる」という思いがあり、何か催しものをするときの案内チラシを配りに回ったときにも、私だけでなく、館長に対しても、「こんなことするからあかんのやろ」と文句を言いに来ます。彼らは未だに「人を信用したらあかん。絶対裏切られるぞ。どこで何を言われているかわからへん」との思いをもって生きています。

(*1)伊勢表：竹皮で作る草履表^{そうりおもて}。部落産業の一種。

彼らの子の世代（ちょうど私たちの世代や私よりもう少し年齢が上の人）は、「今まで差別を受けたことがないから大丈夫」「この地域のことを言う必要はあらへん」と言う人がいたり、「人権学習はしてもらってかまへんけど、わざわざ特別なことするから差別が生まれるんや」「地域の人じゃなく、ほかの地域の人が学ぶべきことやろ」という方もみえます。中には、子どもの頃に友だちの家に遊びに行ったら「あんたどこから来たん？」と聞かれて「A町」と答えたら、「A町にもいろいろあるやろ。A町のどこ？」と聞かれて、「B」と答えたら、「Bの子は帰って」と言われた体験のある方もみえます。解放運動に対する考え方はまちまちで、もちろん差別をなくす活動を積極的にやっていくべきだという考え方をおもちの方も少なからずみえますが、どちらかと言うと「言わなければ何とかなる」と考えている人が大半だと思います。

そんな状況なので、学校での取組については、地域のことを前面に出しての取組はできていません。ただ、部落問題学習はやっていかないといけないということで、小・中学校とも取り組んでいます。小学校では、子どもたちが「うちの校区はどこもいいところやよね」と実感できる地域学習に取り組んでいます。

(2)「地域学習・活動」について

そんななかで、雲出市民館でのメインの活動は「地域学習・活動」だと思っています。この活動の対象者は小学4年生から中学3年生までです。この活動の成り立ちは、2001年当時、同和対策事業関連法が期限切れになる直前の時期に、地区学習会の場がなくなるかもしれないという状況のなか、「絶対なくしたくない」という子どもたちの思いがあつて当時の市長にかけあつたりもしました。この四角枠内の文章(右記)を書いたのは当時の小学生たちです。小学生4人の子たちが中心となってすすめてくれました。その結果、2002年度からは「地域学習・活動」として存続・発展させることができました。

そのような背景のもとに、この「地域学習・活動」が続けられているということ、毎年開講前におこなう説明会で、子どもにも保護者にも伝えていきます。やはりここの部分を抜きにして、何のためにこの活動があるのかも

知らず、「なんかわからんけど勉強も教えてくれるからタダで塾に行っているようなもの」という感覚で参加してもらっては困るということ、当時の小学生の「この学習会が好き」「絶対なくしてほしくない」という思いから始まっていることを伝えるようにしています。

保護者の代表の方や地域の解放同盟の方、学校の先生、市教委の方にも入ってもらって、4月・8月・2月に実行委員会を開いて、「こんな子どもがいるので、こんな取組をしようと思っている」などと情報共有しながらすすめています。実行委員長には、保護者の方になってもらっています。今年参加している子どもは、4年生が4人、5年生が1人、6年生が2人、中1が2人、中2が3人、中3も3人という構成です。毎週木曜日におこなっていて、月1回は人権学習をおこなっています。そこに焦点を当てながらお話しできればいいなと思っています。

小学生は、地域学習をメインにした人権学習をやっています。中学生は部落問題学習をおこなっています。中学生になる前に、この地域のことを伝えます。A町のB・C・Dの全地域の子が参加していますので、「B地区が部落だということを親の口から伝えてください」とはたらきかけています。この地域のことを出して学習をすすめていきますので、「必ず話をしてください。」とお願いしています。どのように伝えたらいいかということでは悩まれる方もいて、ある方は半年間悩んでおられました。いろいろと悩んだ末に伝えられたそうです。なかには姉から伝えられた

○地区学で「自分から逃げない」というこだわりを持てた。地区学で学んだ自分のこだわりがあるから、どんなことでも正面からぶつかっていけそうな気がした。地区学は、自分にとって一生の宝物だと思う。でもその宝箱には、宝はあまり入っていない。もっとその宝を増やすためにも、これからも地区学をなくさないように、必死にいろんなことをチャレンジしていきたいと思う

○私は学習会がめんどくさいと思ってしまっていた。でも、この頃楽しいと思える時が出てきた。人の意見を聞いて自分も言う。みんなでやる意見交流が楽しくなっていた。前までの自分なら、こんなこと一度も思い浮かばなかったと思う。でも、学習会を続けていって楽しいと思えるようになった。自分が素直に楽しいと思えた自分の気持ちが好きだから、この気持ちをそのまま持ち続けていきたい。そうするには、やっぱり学習会は絶対なくてはならないもの。

りする家庭もありました。市民館に来てもらって一緒に話をするというのもあっていいけれど「一言めはまず親から伝えてほしい」とお願いしています。最初に親から伝えないと、その後親子で部落問題の話はできないと考えています。その関係づくりのきっかけとして、中学校に入る直前の時期に敢えて話す機会をつくるのが一番いいのではないかと、親としても楽なのではないかと、自分の経験もふまえてそう思っています。

「地域学習・活動」の目的として、このようなことを掲げています（右記）。人権学習としては、自分について考えたり、自分の思いを語ったり、生き方を語ったり、相手の思いも聴いたりしながらそこに自分の思いを返していくということや、「この地域が好き」ということから、自立して仲間とつながり行動していく力をつけていくことをめざしています。

「地域学習・活動」のなかで、子どもたちは自分のことをなかなか語るできません。丁寧に話さないといけないとっていたり、良いことを言わないといけないとっていたり、「私の気もちって何？」とっていたり、いろんな子がいるので、その子どもたちが話せるようにすすめていければいいかなとっています。この学習会はこの地域の子だからこそつきたい力、これから社会に出て何かあったときに帰って来られる関係性や場所づくりのためなのかなとっています。なので、「自立」させることを大事にしています。やはりまずは自分自身が「立つ」ことができこそ仲間とつながれるし、きちんと自分をもっているからこそ周りの子とつながりながら行動していきたいと思える力をつけることをめざしています。

<「地域学習・活動」の目的>

- ①自分の思いを語ること・相手の思いを聴くこと
- ②地域の良さを発見し、「この地域が好き」と言えること
- ③自分から学ぶ習慣を身につけること
- ④自分の進路を切り拓く力をつけること
- ⑤仲間と一緒に学習する意味を考えること



『差別を許さない自分づくり・仲間づくりを行うこと』
『差別をなくしていくために行動すること』

（3）地域の子どもの現状

次に、今の小学生の状況を話そうと思います。小学生については、地域学習をするので「この地域のこと知りたことは何？」と問うことから始めます。今年は「もう何回もやっとなるからわかつとなるし…」という雰囲気だったので、わたしが「あそこにある記念碑のこと知ってる？」と尋ねたら知らなかったので、「じゃあ、記念碑のことをやろうや」ともちかけて、勉強することになりました。やはり記念碑に込められた思いを知ってほしかったし、子どもたちはB地区のことを素敵などころだと実感してほしいという思いもあって、記念碑のことについて勉強しました。その記念碑にはこの地域をつくった人のことが書いてあります。本当にいろんな苦労があって、この地域を開墾していった美しい田んぼをつくってくれて、今のこの地区があるということを絶対忘れないということが書いてある素敵な記念碑なのですが、小・中学生はもちろん、おとなでもなかなか読めないような文字で書いてあります。そのため、「辞書を引いてみんなで調べていこう」とはたらきかけ、今年の現代語版を完成させました。本当に素敵なものが完成したなと思います。



「地域学習・活動」で1年間勉強してきたことを毎年閉講式で発表させてもらうのですが、「こんなことを調べました、こんなことがわかりました」と話すだけではもったいないので、今劇づくりをしています。この取組には目標があります。この劇を地域の文化祭で上演することで、この地域の方たちに「学習会ってこんなこと勉強しているんやな」とか「うちの地域のことを考えてくれてるんやな」と思ってもらいたいです。そして、子どもたちがその様子を見て、「自信をもって取り組むことって返ってくることがあるんやな」と思ってもらいたいです。

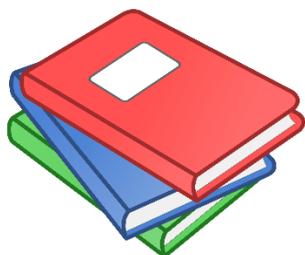


中学生に対しては、地域で解放運動に取り組んでいる方から自分の生き立ちや経験を話してもらいました。その生き方を一つのモデルとして、こんな生き方をしてきた人がこの地域にいるということを伝え、子どもたちには「自分の経験をなんで話してくれたんやろ?」というのを考えてほしくて始めました。この取組をすすめていくなかで、ある中学生が学校で「うちの地域は部落やねん」と友だちに伝えたそうです。学習会の参加者の中には「いつか自分も差別を受けるのではないか」「結婚や就職のとき

に何かあるのではないかと漠然とした不安を抱えながら来ている子がいます。なので、伝えることに関しては「なぜ伝えたいのか」と考えたり、どう伝えたら私の思いが伝わるかをしっかり考えてほしいと思っています。周りの子に伝えるならその子自身の思いを聞いておきたいから、事前に伝えてほしいと言っています。そこで、もう一度みんなで考えられるように、今年(2018年)4月から施行された東京都国立市の条例(=「国立市女性と男性及び多様な性の平等参画を推進する条例」)の勉強を始めました。その条例の中には、「アウティング(*2)は絶対したらダメだ」ということと、「カミングアウト(*3)は個人の権利である」ということが書いてあります。すぐわかりやすく冊子にもなっているので、いろんな学習の場で使ってもらえるのではないかと考えています。性的マイノリティで言えば、カミングアウトは個人の権利です。部落問題に関しても、もちろんカミングアウトは個人の権利で、自分がしたいと思ったらすればいいけれども、「みんなにかかわってくること」だということを伝えました。また、以前ト田先生に紹介していただいたつながりから、田中一歩さんと近藤孝子さんとの出会い学習もさせてもらいました。子どもたちは今、1年間学んできたことで考えたことや思っていることについてのまとめ作業に入っています。「いまのときのきもち」というタイトルをつけて、作業に取り組んでいます。

(*2)アウティング：他者の秘密を本人の了解を得ずに暴露すること

(*3)カミングアウト：社会一般に誤解や偏見を受けている少数派の立場であることを公表すること





うちの地域の子どもたちには、発信する力がまだまだ十分には身につけていません。文章についてはようやく書けるようになってきましたが、これは小学生からの積み上げが大事なだと子どもたちの姿から実感しています。なので、小学生の頃から書かせたり、思いを出すことを大切にしようと思うようになりました。「思ったことを素直に話して大丈夫」「ここでは何を言ってもええんや」「文章になってなくてもいい」と思わせるようにしています。

先ほどのト田先生のお話の吹奏楽部員と同様、うちの地域の子どもたちも自信がなくほめられたことが少ない子が多いです。いろんな思いを素直に話していくことが一番大事なことだと思うので、それを小学生のうちから話していく必要性を感じています。この活動は市民館だけで取り組めばよいというものではありません。市民館の力だけでは絶対に子どもたちは変わりません。小・中学校でも、保育園や幼稚園においても同じ思いをもって、同じ方向を向いて取り組んでもらうことで、市民館の学習会が成り立ちます。そういう思いの共有を先生方にはお願いしたいと思っています。

(4) 今後に向けて

わたしがこの市民館で働かせてもらうようになって4年めになりますが、まだ何もできていません。1年めにかかわった子に対しては、うまくかかわれなかったと後悔しています。中学生になる前に地域のことを伝えるという取組は、私が市民館に勤めるようになってから元に戻したことです。1年めの子どもの中にはこの地域のことを聞いてない子もいました。その子の親は「なんで言わなあかんの？言いたくない」という意識をもっていて、その子自身も「地域学習・活動」をする意味がわからず、1年間続けても「なんでこんな勉強せなあかんのかわからなかった」と言ったまま閉講式を迎えました。中学校卒業時にその子の親が地域のことを話したときに、「だからこういう勉強しとったんや」と言ったそうです。その子が4月から専門学校生になるのですが、スタッフとして戻ってきてくれないかと声をかけています。「名古屋の専門学校に通うから、あんまり来れへんかわからへんけど…」と言いながらも考えてくれようとしています。あのときの後悔を取り戻したいという思いがあって、やり直せないかと思っています。

子どもたちの成長はとても面白くて、1年前に「どう書いたらええかわからへん」と言っていた子たちが今では自分の思いを3～4枚も書けるようになっていました。市民館の役割というのは、わたしが教えるのではなく、その子たちの思いを引き出したり、その子たちが思いを書くためのサポートをしたりすることなのかなと思っています。そのあたりは保育士さんの役割と同じではないかと思っています。そのために学校とつながり、わたしは親や子どもの思いを聞かせてもらうことが多いので、そのことを代弁して学校に伝えることがわたしの役割なのかなと思っています。地域の方たちに「ここの地域、そんな悪くないやん」と思ってもらえるように、いろんなことを届けていきたいし、「市民館って面白いやん」と思ってもらうことがまず第一歩かなと思っています。この地域の人たちが不安に思わなくていいように、「わたしが市民館でできることって何だろう」ということを常に考え、それを行動に移していくことがわたしの役割であり、市民館にいる意味だと思っています。

3 原田さんのお話を受けて

原田さんのお話の後、ト田さんと原田さんの対談形式ですすめられました。お話の内容について、ト田さんがさらに質問を投げかけ、原田さんに丁寧に答えてもらいました。対談では…、

・田中一步さんと近藤孝子さんとの出会い学習では、お二人に部落問題を中心にすえてお話いただき、当事者ではない人が部落問題に向き合うことの意義について、子どもたちが考えさせる機会になったこと

・さまざまな学習を通じて、子どもたちが「部落差別を本当になくせるかもしれない」という思いをようやくもてるようになったこと …などが確認されました。



お二人のお話を受けて、参加者が感じたことやこれから取り組んでいきたいことを、グループで出し合い共有し合いました。

～人権保育推進のための「次の一歩」を考える（未来への種まきワーク）～

本日の講座の内容を受けて、人権保育を推進するために一人ひとりが「発信(次の一歩)」としてやってみようと思うことを書いていただきました。

- ・知らないことを知っていく。まずは自分の地域のこと。自分だけが知るのではなく、全職員で学んでいく。
- ・地域にもっと出かけよう。保育所をアピールして、子どものことを知ってもらおう。保育所を卒園して以降も、地域の中で育つ子どもたちを見守ってもらいたい。
- ・“こんな子になってほしい”という親の思いを聴く。そのために今大切にしていることを話す。
- ・地域にある施設の成り立ちや、その施設で取り組んでいる内容を知ることから始めようと思う。
- ・地域の保護者だけでなく、“みんな”で同じ方向を向いて取り組めるようにもっと投げかけをして“話を聴く、考える”ことをしていきたい。



～参加者アンケートより～

- 原田さんの話を聞いて、取組を続けていくことが大切だと思いました。職場に戻り、皆で課題や取組についてももう一度話してみたいと思います。話すことの大切さを感じた講座でした。
- 地域が抱えている問題を原田さんのお話から聞かせていただくことができ、自分を振り返って何ができるかを考える機会となりました。
- 小学校や地域と連携して取り組んでいきたいと思いました。支え合える助け合える仲間づくりをしていきたいです。
- 原田さんの思いをストレートに聞いて、変わっていく子どもたちがいます。自分の周りにいる子どもたちや保護者、家族が変わっていくことを願いとして、めざしていきたいと思いました。
- そっとしておけばなくなるという考えの中には、今もある部落差別を感じずにはいられない反面、原田さんがつなげていく役割を担っている姿が輝いてみえました。子どもたちが「なくせるかもしれない」と思えるようになったというお話がありましたが、なくしていけるよう、なくしていこうと行動する一人でいたいと思います。

